

目次

凡例 v

はじめに 1

第一部 芭蕉の「軽み」解釈 13

第一章 先行研究における評価 15

第一節 「軽み」論の史的展開 15

第二節 「軽み」研究史の概観 57

第二章 「花見の句のかかり」考 71

第一節 花見の句と「軽み」 71

第二節 「慣用句」および「通俗性」を「軽み」とする説 72

第四節 支考の思想と生き方——世情の人和——	218
第三章 支考と地方俳壇	227
第一節 支考の地方行脚とその特色	227
第二節 『東西夜話』の「軽み」	229
第三節 支考の芭蕉顕彰——仮名碑建立と仮名詩——	245
おわりに	269

資料編

一、「軽み」用例一覧	273
二、『雙林寺碑銘註昼錦抄』翻刻と解題	288
参考文献一覧	311
初出一覧	323
あとがき	325
索引	001

㊦

凡例

○古典文献の引用について

一、各古典本文の引用は、特に注記しないかぎり以下の文献によった。

・芭蕉の発句

『新編日本古典文学全集70 松尾芭蕉集①全発句』（小学館、一九九五年）

・芭蕉一座の連句

『校本芭蕉全集第三～五巻 連句編（上・中・下）』（富士見書房、一九八八～八九年）

・芭蕉の俳文

『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②紀行・日記編俳文編』（小学館、一九九五年）

・芭蕉以外の発句・俳文

基本的には『古典俳文学大系』（集英社、一九七〇～七二年）所収の『蕉門名家句集一・二』『蕉門俳論俳文集』俳文編による。ただし『本朝文鑑』は『俳諧文庫19 俳諧文集』により、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」雲英文庫蔵本（文庫31 A1658）の画像によって校訂した。

・芭蕉の書簡

今栄蔵『芭蕉書簡大成』（角川学芸出版、二〇〇五年）

・蕉門俳人の書簡

飯田正一編『蕉門俳人書簡集』（桜楓社、一九七二年）

・蕉門の俳論

『去来抄』『三冊子』『宇陀法師』は『校本芭蕉全集第七巻 俳論編』（富士見書房、一九八九年）、『葛の松原』『二十五箇条』『俳諧問答』『旅寝論』『続五論』『歴代滑稽伝』は『古典俳文学大系10 蕉門俳論俳文集』、『俳諧十論』は早稲田大学図書館の右データベース上の中村文庫蔵本（文庫18 00175）画像によった。

・西行歌

『西行全歌集』（岩波文庫版、二〇一三年）

一、引用にあたり、読解の便を考慮し、適宜濁点・ふりがな・句読点を私に補い、旧字・異体字は特殊な意味を持たないかぎり通行の字体に改めた。また、原文の明らかな誤り（「惟然」を「推然」、「俳諧」を「俳諧」とするなどの誤記）は訂正し、いちいちことわらなかつた。漢文の返り点・送り仮名は基本的に引用元の表記に従ったが、書簡の場合は返り点・送り仮名を付さず、初回の掲出時に読み方を傍書した。

【例】「奉_レ存_レ候」↓「奉_ん存_ん候」

○研究文献の引用について

- 一、引用にあたり、旧字・異体字は通行の字体に改めた。
- 一、引用文の傍線は原則として著者による。
- 一、注記内で書誌のみを記載する際は敬称を略した。

はじめに

一 本書の目的と「軽み」研究の現状

本書は、俳文学研究において長年のあいだ異端視されてきた蕉門俳人、広瀬惟然（？）～正徳元年（二七一）と、各務支考（寛文五年（一六六五）～享保十六年（一七三一））における「軽み」の展開を明らかにすることを目的とするものである。「軽み」とは、松尾芭蕉（正保元年（一六四四）～元禄七年（一六九四））がその晩年に、自派の指針として提唱した俳諧観である。その教説は、門人たちによって折々に書き留められ、論書や書簡の中に祖述の形で蓄積された。その早い例として挙げられるのは、芭蕉の郷里伊賀の門人で、当地の俳壇の中心人物であった土芳（明暦三年（一六五七）～享保十五年（一七三〇））の著書『三冊子』（元禄十五年成立）に記録された、元禄三年の発句「木のもとに汁も鱈も桜かな」に対する「かるみをしたり」との発言であった。また、芭蕉の最後の旅となった元禄七年の大坂行きの際別句会において、芭蕉が「今思ふ体は、浅き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに軽きなり。其所に至りて意味あり」と述べたことを、江戸の門人子珊が俳諧撰集『別座鋪』の序文で明らかにしている。この年、門弟に宛てて書かれた芭蕉書簡を見ると、「かるみと興と専に御はげみ、人々にも御申可被成候」（六月二十四日付杉風宛）、「随分新意のかるみにすぎり、おとりなき様に」（七月十日付曾良宛）などといって「軽み」の句を作ることを勧め、また彼らの作品についても「いまだかるみに移り兼、しぶくの俳諧散々の句」（八月九日付去来宛）、「惣体かるみあらはれ大悦不_{すなからず}少_{いせん}候」（九月二十三日付意専・土芳宛）などと評している。つまり、元禄三年頃から志した「軽み」の俳

風は、最晩年に至って、句作りに欠かせない概念となり、また作品評価の基準となるほどの重要な理念となっていたのである。

したがって、芭蕉の俳諧観を知るためには、「軽み」の理解は避けて通ることのできない問題である。しかし、芭蕉の「軽み」に関する言説は、その概念を説明するものではなく、具体的な作品について語られた断片的な感想、批評としてのものであった。この点から、従来の研究ではそれらの発言内容から帰納的に「軽み」の本質を導き出すとする手段がとられてきたが、芭蕉が「軽み」の例とした特定の作品に研究が集中したり、作品中の「軽み」要素の認定、すなわち「どのような点を「軽み」とするか」が論者によって異なったりする問題が生じた。結果的に、「蕉風俳諧の究極的な美的理念なのか、あるいは蕉風展開史上における最終的な風調・句体なのか、はたまた芭蕉晩年における自由無礙の芸境芸位なのか、さらには造化に随い造化にかえる芭蕉の生き方や人生観の謂なのか」等の議論があつて、現在に至ってもその評価は一定しない。

二 「軽み」論への疑問——心と言葉——

諸説に共通する「軽み」認識は、おおよそ「作為や観念の過剰を排し、日常性の中に、日常的な平易なことばによる詩の創造の実現をめざす理念」⁽²⁾との規定に代表される。しかし、夙に雲英末雄氏が指摘しているように、芭蕉が「軽み」を唱えはじめた元禄時代初期には、俳壇全体に「やすらかな風体」⁽³⁾（和及編「番匠童」元禄二年刊）が流行して、日常的な題材と日常的な言葉による表現は、当時決して珍しいものではなかった。芭蕉がそうした表現のみを庶幾していたのなら、門人に向けてことさらに「軽み」の実践を求める必要はなかったはずである。しかし、実際芭蕉は並々ならぬ熱意を込めて「軽み」を説いた。この点から、芭蕉の「軽み」唱導には、単に「日常的な平易な

ことばによる詩の創造」にとどまらない重要な目的があつたのではないかと思われる。

この点に関連して注目されるのは、前掲『三冊子』の以下の記述である。

常風雅に在るものは、思ふ心の色、物となりて、句姿定るものなれば、取物自然にして子細なし。心の色うるはしからざれば、外に詞をたくむ。

つまり、「常に俳諧に専心している者は、感じたそのままを句にしても詩らしい姿が整うので、特別に技巧を労す必要もない、心の内実がよくないからそれを言葉遊びでごまかそうとするのだ」というのである。これは遡れば、『古今和歌集』仮名序の「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり」⁽⁴⁾にまで繋がるきわめて素朴な詩歌観だが、重要なのは後半の「心の色うるはしからざれば、外に詞をたくむ」との部分である。ここで土芳は、「外に詞をたくむ」原因が「心の色うるはしからざ」ることにあるといっている。また、「常風雅に在る」というのも、当然言葉の問題ではなく、精神的に風雅を志しているという意であろう。

また芭蕉晩年の弟子で、「軽み」の教えをよく理解したといわれる彦根蕉門の許六（明暦二年（二六五六）〜正徳五年（二七二五）も、「俳諧自讀之論」⁽⁵⁾に

かるきといふは、発句も付句も求めずして直に見るごときをいふ也。言葉の容易なる、趣向のかるき事をいふにあらず。腸の厚き所より出て、一句の上に自然ある事をいふ也。

と述べていて、土芳の主張と通うところがある。すなわち、「蕉風俳諧における「軽み」とは、頭を使って考えずとも手に取るように句意が明瞭なものをいうのであり、簡単な言葉を使ったり、句の構成を単純にしたりすることではない。心の深いところから出てきて、句の表現に自ら表れていることをいうのだ」との意であろう。つまり、土芳と

許六は同じことを逆の方向から説明しているのであって、要するに彼らの主張は、言葉の良し悪しを考える前に自分の心を整えよということであり、それが「軽み」を実践する上で不可欠なプロセスだということであった。そして、この点が他門の「やすらかな風体」と芭蕉の「軽み」における差異であり、芭蕉がことさらに「軽み」を重要視したのも、そのためではなかったかと考えられるのである。先行研究において縷々指摘されるように、『三冊子』の引用部の少し前には、「高く心を悟りて俗に帰れとの教えなり」とあって、やはり「俗に帰る」前に「心」を高く保つことが必要とされている。つまり、「軽み」においては、やはり表現面の特徴だけでなく、「軽み」の「心」とは何か、「重み」の「心」とは何か、という問いが必要とされてくるであろう。

三 蕉門俳人への注目

本書で惟然と支考を取り上げているのは、まさにこの点による。惟然は元禄元年（二六八八）、支考は同三年の入門であり、実際に親炙した期間は決して長くないが、芭蕉の最後の旅となった同七年の大坂行に同道するなど、芭蕉からかなり信頼されていたことがうかがわれる。そして、これらの期間を通じて芭蕉が意識的に相当の力をこめて取り組んだテーマこそが「軽み」であった。

前述のように、最晩年の芭蕉は、周囲の俳諧作者の評価にあたって「軽み」に合致する作品を賞賛し、そこから遠いものほど厳しく批判するという姿勢をとっている。これはすでに、「軽み」が芭蕉の作品評価の基準として、また到達すべき理想としての位置を占めていたことを示すものである。つまり、惟然や支考は「軽み」の唱道者としての芭蕉に親しみ、芭蕉の側では、彼らに「軽み」の実践者としての素質を見ていたと考えられるのである。しかし、そのように芭蕉と「軽み」の時代を共有した惟然と支考も、十分な俳論研究、作品研究がなされないまま、許六や去来ら一部の弟子たちの非難のみを根拠として、「軽み」研究から等閑視されてきた経緯がある。そうした彼らへの誤解が、「軽み」研究の混乱の一因ともなっているのではないかと思われるのである。

四 先行研究における惟然の評価

まず惟然に関しては、鈴木重雅氏が昭和初期に惟然の総合的研究に取り組み、惟然の生涯と俳諧活動、俳風について豊富な資料を用いて詳細に論じた『俳人惟然の研究』（俳書堂、一九三三年）を刊行しており、現在も裨益するところが多い。鈴木氏は、芭蕉に近侍していた時期の惟然の俳風について、以下のように述べる。

芭蕉の膝下に教えを受けたのは暫くの間であつたのであるけれども、「藤の実」を見れば分る様に、その俳風は醇乎として醇なる蕉風の句のみである。そして、内容から言へば、客観的、叙景的なものが殆んど全部を占めて居る。(略)「藤の実」時代における惟然の句は彼の最も光彩を放てるものであつて、之を芭蕉の句集中に挿入して置いても、殆んど甄別し難き者、比々皆然りである。このまゝ、で行つたならば、彼の進境更に著しく、其風の徒を凌ぐに至つたかも知れない。

と述べ、景気を重視した初期の惟然句を高く評価する一方で、後年惟然がさかんに取り組んだ口語調俳諧については、芭蕉の滅後は、之が啓導の指針を失つて、軽洒の極、放恣に流れ、邪路に陥るに至つたのは、蓋し、已むを得ぬ事ながら深く惜むべきである。として、芭蕉没後の惟然の俳風を難じている。

また「軽み」研究の嚆矢として知られる中村俊定氏は、「芭蕉晩年の風調々かるみ」に就て」（『国文学研究』七号、一九三六年十一月）において、『去来抄』にみえる「（口語調句は）句とは見えず」（先師の）宣ひけるを聞まどひ、我

が得手にひきかけ」たものとする惟然批判を引き、惟然の口語調は「軽み」の「皮相な模倣」であり、「安易な邪道」に陥った結果だとしている。

また復本一 郎氏も論考「かるみの論——惟然を追って——」（『元禄文学の開花Ⅱ』勉誠社、一九九二年）で惟然の俳風と「軽み」とを比較して論じたが、最終的には鈴木氏と同様に、元禄七年に惟然が編んだ『藤の実』を「軽み」の選集と認めつつ、後の口語調俳諧の評価に関しては去來の言に賛同する。

しかし近年、これを蕉風につながるものとして捉える説も示されている。まず小瀬渺美氏は、「蕉門における惟然——軽みを中心とした俳諧系譜——」（さるみの会『東海の俳諧史』泰文堂、一九六九年）において、後年の惟然の創作態度に「軽み」の自覚があるとし、その作品についても「惟然が芭蕉に師事した時期の、芭蕉の俳諧理念にどこかかわる作家的血脈の上にあった一つの実り」であるとする。

また沢木美子氏は、鈴木氏以来の惟然に関する単著として『風羅念仏にさすらう——口語俳句の祖惟然坊評伝——』（翰林書房、一九九九年）を刊行し、惟然の生涯や関での評価、遺品について新たな資料も提示しながら論じ、惟然が芭蕉供養のために制作した和讃「風羅念仏」の再現に努めた。沢木氏は、右の著書において、惟然の口語調句を芭蕉の俳諧観に呼応する「軽快句」であるとし、小瀬氏と同様に芭蕉の「軽み」の影響を認めている。また中森康之氏も「蕉門を彩る人々」（佐藤勝明氏編『松尾芭蕉』、ひつじ書房、二〇一一年）に惟然を取り上げ、後年の俳諧活動を含む生活全般を芭蕉の「無分別」や「軽み」の実践であったとする。また堀切実氏は、「芭蕉晩年の『かるみ』の風に同調しない門人が生じたのはなぜか」（『国文学解釈と教材の研究』第三十六卷十三号、学燈社、一九九一年十一月）において、惟然を「軽み」からの逸脱者であるとしつつ、「惟然の『蕉風』」（『芭蕉と俳諧史の展開』ペリかん社、二〇〇四年）においては、口語表現を用いた句にも芭蕉と同質の滑稽性・主観的判断による表現法が認められるとしている。

以上のように、先行研究においては惟然の口語調俳諧と蕉風、特に「軽み」との関係性が論点とされているのであるが、この問題に関しては意見の対立があつて、いまだ明確な解決をみていない。本書では、惟然の句の表現、俳論、人生観の各方面からその特徴を探り、「軽み」との関係論を論じる。

五 先行研究における支考の評価

まとまった支考研究の嚆矢としては、各務虎雄氏の『俳文学研究』（文学社、一九三七年）が挙げられる。同書では「支考系譜」において支考一族の系譜を探り、「誹・俳観」「平話論」「変化論」「姿情論」「虚実論」の五項目を設けてその俳論に検討を加えている。いずれも、芭蕉の祖述を含む俳論として正當に扱っており、分析も支考の著述を縦横に用いて詳細に行っているが、「軽み」に直接関連をもつたものとして説いてはいない。

また、乾裕幸氏の「かるみへの展開」（『初期俳諧の展開』桜楓社、一九六八年）では、「句姿・しをり」と「談林的軽み（拍子・遣句）」を止揚したところに蕉門の「軽み」があるとし、これは支考の「詞の拍子にかゝる時は、かならず姿を忘るゝ物也」（『十論易弁抄』）という言葉に示されているとする。

また、早くから支考を積極的に取り上げ、論じてきたのは堀切実氏である。同氏は『統猿蓑』試論（『文学』一九六九年二月号、同年『日本文学研究資料叢書 芭蕉Ⅰ』に収録）において、従来支考の偽選説が濃い影を落としていた『統猿蓑』の価値を再評価し、その編纂事情と作品評価の両面からこれをとらえなおしている。このうち後者の作品分析において「軽み」に言及し、『統猿蓑』の連句「猿蓑に」の巻、「八九間」の巻の表現を『猿蓑』『炭俵』の連句作品と比較する。その結果、同氏は『統猿蓑』の作品の特徴として、①素材における世俗の生活の俳諧化、②表現における具象性、イメージの尊重、③伝統的抒情性への憧憬と興趣的展開の傾向、の三点を指摘する。①、②は「軽

み」の風調の具体相として指摘されてきたものだが、③は『炭俵』『深川』『別座鋪』以来「軽み」から失われつつあった「伝統的叙情性の回復」という意図によるものと推定した。『統猿蓑』は実質的に芭蕉・支考の共編であり、「猿蓑に」の巻は芭蕉・惺然との三吟である。この点、支考と「軽み」の関連性が指摘できよう。

堀切氏は、初期の論考を『蕉風俳論の研究―支考を中心に―』（明治書院、一九八二年）にまとめ、支考の姿情論において「軽み」の風を指摘する。すなわち、支考は「姿」の重視にもなつて「理屈」の排斥を説くが、「理屈」は従来「軽み」論においていわれるところの「重み」や「ねばり」の一つであり、「姿」が「新しみ」や「流行」とともに説かれる点で、「軽み」に深く関連するものとする。

また『俳聖芭蕉と俳魔支考』（角川書店、二〇〇六年）においては、「軽み」の風を「題材における日常性とそれに伴う表現における平明性」としてふまえ、支考は「俗談平話」の思想と「姿先情後」の説によって「軽み」を継承したものであるとする。

また、中森康之氏は『芭蕉の正統を継ぎしもの―支考と美濃派の研究―』（ベリかん社、二〇一八年二月）において、従来難解・術学的として閑却されがちであり、解釈も困難であった支考の思想性について論じ、その内実を「心と言葉は不可分のものである」とする俳諧観にあるとした。とくに従来、虚と実に分けて説かれていた虚実論を、「虚実自在」という一つのはたらきとしてとらえ、その核を「人情の機微を敏感に察知できる臨機応変の自在な心」だと規定した。ただし、同書では「軽み」に関する直接的な言及はしていない。

このように、支考俳論における近年の成果は堀切氏や中森氏の研究にあるといつてよいだろう。本書では、堀切氏が指摘した姿情論・俗談平話における表現論としての「軽み」や、中森氏が論じた思想的な側面をふまえ、支考の「軽み」を構造的に捉えてみたい。

六 本書の構成

右の点をふまえて、以下では具体的に本書の構成について述べる。

第一部「芭蕉の「軽み」解釈」では、近代以降現在までの「軽み」研究文献において、何が「軽み」とされてきたのかを探り、その問題点を指摘したうえで、新たな視座を提示する。

第一章「先行研究における評価」では、現在までに公表されてきた俳文学関係の論文のうち、芭蕉の「軽み」について言及したものを挙げ、その成果を整理する。これまで「軽み」に関わる論考は多数公表されているが、論者の注目する点や扱う資料が異なるため、その結論もさまざまである。第一節「「軽み」論の史的展開」では、概念論から作品論への移行、概念論としての展開、考証学的な視点、連句への着目、撰集論への展開、相対化の試み、門人の「軽み」論の七項目を立て、研究史の流れを追った（文献の選定にあたっては、従来作成されている「軽み」研究のリストを参照した）。第二節「「軽み」研究史の概観」では、従来論説の方向性が表現の特徴を定めることに偏り、思想的側面については各論者の見方にゆだねられている現状を指摘した。

第二章「「花見の句のかかり」考」では、元禄三年作の芭蕉の花見の句に指摘されてきた「軽み」の要素、すなわち通俗性の志向とリズムの追求が、本来の芭蕉の意図とは異なったものである可能性を指摘し、『三冊子』という「かかり」の語義の検証を通して、芭蕉が当該句にこめた「軽み」の思想的側面を明らかにする。

第二部「惺然における軽みの展開」では、芭蕉入門後の惺然が芭蕉との関係をどのように築き、また芭蕉がさかに説いた「軽み」をどのように受容したのかを、具体的な事実と作品に基づいて検討する。

第一章「惺然と芭蕉」では、惺然の入門から芭蕉の死没までの両者の交流をたどり、芭蕉がその最晩年の旅に惺然

を随行させ、彼の作風や人格を賞賛していたことを資料によって示す。

第二章「惟然の表現と思想」では、惟然が芭蕉から受け継いだ特徴について、彼らの表現と思想の両面から論じる。第一節「惟然の口語調俳諧に対する批判」では、去来・許六らに始まる惟然批判の論調を整理し、芭蕉没後の口語調俳諧に批判が集中していることを確認した。第二節「元禄七年以前の俳風」・第三節「元禄八年以降の俳論と俳風」では、芭蕉生前・没後における惟然の作風を比較し、芭蕉没後の逸脱とされた口語表現も、芭蕉生前からその指導に当たって行われていたものであることを明らかにした。第四節「あだなる風」と「軽み」では、これまで見出されていなかった惟然と芭蕉の作風の共通点を、去来が伊賀の俳風として示した「あだなる風」の視点から指摘した。第五節「惟然の思想と生き方―「かるき生涯」の知足―」では、そうした作風を支えている両者の思想的なつながりを「知足」という側面から説明し、これも「軽み」の要素であることを論じた。

第三章「惟然と地方俳壇」では、惟然が地方行脚のなかで説いた俳談と、芭蕉顕彰の事跡を取り上げ、両者ともに「軽み」を根底とする芭蕉とのつながりに基づくものであったことを指摘する。第一節「惟然の地方行脚とその特色」では、惟然が芭蕉没後に行った行脚の概略を示し、第二節「朱拙と惟然―『梅桜』『けふの昔』の俳論―」・第三節「千山と『二葉集』」では、九州行脚・播州行脚によって知遇を得た朱拙・千山との関わりや、現地で説かれた俳論が彼らの俳諧活動に与えた影響を考察する。第四節「惟然の芭蕉顕彰―風羅念仏と芭蕉像―」では、第三節とも関わる惟然の俳諧活動として、芭蕉像の建立や風羅念仏の創作についても触れ、惟然の「軽み」的生き方の多様性について考えた。

第三部「支考における軽みの展開」では、同門俳人からの攻撃によって長らく「俗臭の多い野心家」という先入観のもとに、信頼に値しない人物として語られてきた支考を取り上げ、惟然とともに「軽み」唱導期の芭蕉に随時した支考の経歴と俳論を整理して、その言説が芭蕉の教導につながるものであることを示した。

第一章「支考と芭蕉」では、支考の経歴と芭蕉との交流を、第一節「芭蕉入門前の支考」・第二節「蕉風俳諧との出会い」・第三節「芭蕉随伴期の支考」の三期に分けて整理した。惟然と同様、支考も晩年の芭蕉に高く評価され信頼された人物であることはすでに先行研究によって指摘されているが、本章では具体的な資料によってこれを追認した。

第二章「支考の表現と思想」では、支考の俳論や思想のなかにみえる「軽み」の要素について論じた。第一節「支考俳論の特殊性」では、支考の俳論が他の門人たちの間書的な俳論とは異なり、一定の体系性をもって構築されたものであることを述べた。第二節「俗談平話を正す」・第三節「娯情の論」では、従来から「軽み」の影響として指摘されている俗談平話および娯情論について、心とことばの一体化、人間の精神的融和を目指す点に、支考なりの「軽み」の展開がみられることを指摘した。第四節「支考の思想と生き方―世情の人和―」では、そうした人間精神と俳諧との関わりに見出される支考の「軽み」の特徴について説明した。

第三章「支考と地方俳壇」では、支考の地方での蕉風唱導のあり方を、具体的な資料を挙げて論じた。まず第一節「支考の地方行脚」において、彼の生涯における行脚と俳論書制作との関係を整理し、第二節「『東西夜話』の「軽み」」では、北陸での現地俳人への指導内容を『東西夜話』によって確認し、「風雅はすなほなるべし」「物のあくまで見るまじきいさめ」といった具体的な教説のなかに「軽み」が活かされていることを説明する。第三節「仮名碑建立と仮名詩」では、京都双林寺の仮名碑建立事業の内容と、仮名碑から仮名詩への展開を整理し、支考なりに芭蕉の俳諧観を後世に伝えるべく行った顕彰活動として、彼の俳論と矛盾するものではないことを述べた。

以上、本書では三部八章にわたり、惟然・支考と芭蕉の「軽み」との関わりを中心とした論を展開し、全体の総括

は巻末の「おわりに」において行った。

注

- (1) 『日本古典文学大辞典』第二卷（岩波書店、一九八四年）の「かるみ」の項（堀信夫執筆）による。
- (2) 中野沙恵「かるみ」『国文学解釈と教材の研究』第三十卷十号（特集・古典文学のキーワード、一九八五年九月）
- (3) 「元禄俳壇と芭蕉」〔『芭蕉講座』第三卷（有精堂、一九八三年）〕、『新日本古典文学大系 元禄俳諧集』解説（岩波書店、一九九四年）。ただし雲英氏は、当代俳壇における芭蕉の特殊性も認めており、点業を捨てたこと、新風の希求、造化随順の思想などをその具体相として挙げる。
- (4) 引用は『新編日本古典文学全集 古今和歌集』（小学館、一九九四年）による。
- (5) 元禄十一年成立、のち『俳諧問答』として天明五年（一七八五）に刊行。

第一部 芭蕉の「軽み」解釈